

7.1 古代の木製鎧について

(1) はじめに

大毛沖遺跡で出土した木製鎧は古代馬具史を語る上で貴重な発見となった。遺跡から出土した鎧は全国的に見ても20数例しか確認できない。したがって、この20数例で扱える事象は限られてくる。資料の集成、木取りの方法、鎧の変遷などがある。本稿では特に資料の集成に重点を置き、大毛沖資料の位置付けをおこなう。

(2) 大毛沖の鎧

大毛沖遺跡で出土した鎧は一般に「舌鎧」と呼ばれるタイプ。壺部はヨコ9.5cm、タテ1 大きさ1cmを測る。舌は踏込部で遺存長20cm、最大幅約10cmを測る。吊手部は壺部との接点部で3 × 4 cmの四隅を面取りした橢円形に近い断面形、遺存長で24cmを測る。

樹種は広葉樹、つばき科サカキ。

樹種

木取りの方法は芯持ちの幹部と枝部の枝分かれした部分を利用している。

木取り

黒漆膜面の塗り構造は木胎に直接漆を塗布するのではなく、木胎→炭粉下地→赤褐色系 漆

漆の塗り構造をなす*1。

鳩胸は中央に稜線をもち球形に近い形を作り出している。舌は足を乗せる面となる踏込 細部の特徴はよく使用させているため、漆がはがれ磨耗している。断面形態はU字形となる。踏込の側面の柳端は幅1.5cmの凸部が壺から続く。下面の舌裏は鳩胸にある稜線が続く。

吊手部分の傾きから左足用の鎧と考えられる。

鎧の年代については、出土地点が旧流路ということもあって、確実な共伴関係が押さえ 年代られない。出土した層位は、旧流路Ⅱb層、沖縄年の古代N期に相当し、10世紀前半代に位置づけられる。

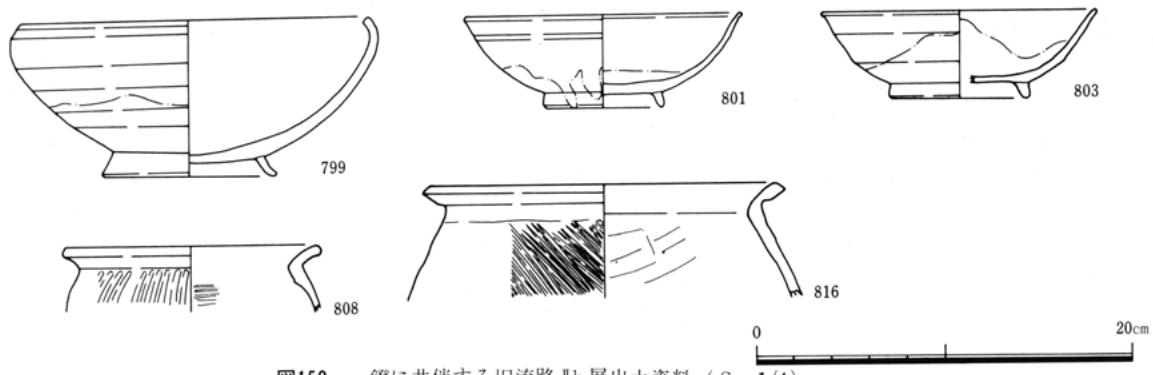


図150 鎧に共伴する旧流路Ⅱb層出土資料 (S=1/4)

*1 樹種・木取り・漆の分析は(財)元興寺文化財研究所主任研究員 北野信彦氏の鑑定結果に基づいて記述。

(2) 遺跡出土の古代木製鎧について

全国で木製鎧の出土例は大毛沖例を含めて管見に拠ると21遺跡26例確認している。年代的には古墳時代～平安時代まで資料に限る。形態は大きく3種類に分けられる。

A 輪鎧

輪鎧は古墳時代に主に見られる形態。古墳の副葬品として出土する鎧は木芯鉄板張輪鎧が多い。

藤田新田 木製品は宮城県藤田新田遺跡から出土している。出土した遺構はSD302とされている河川跡。共伴する遺物は古墳時代前期から中期の土器。踏込部が一部欠損しているが、ほぼ完形品。吊手部と踏込部が一体となる。吊手部の先に孔がある。

神宮寺 他例に5世紀末から6世紀後半に比定されている滋賀県神宮寺遺跡例がある。

B 壺鎧

壺鎧は杓子型と三角錐型、そして無花果型がある。木製以外では木芯を鉄板で覆い銛留めした木芯鉄板張壺鎧とすべてが金属で作られた金属製壺鎧がある。古墳時代から奈良時代にかけて主に見られる形態。木製品の出土例は管見では15遺跡20例と木製鎧のなかで最も多い。

杓子型 杓子型は現状では山形県鳩遺跡のみ。杓子型は鉄製のものが多く、6世紀にはほぼ消滅する。したがって、鳩例は年代的には7世紀と後出するため、古い形態が東北地方に残存していたとも考えられる。

三角錐型 三角錐型（琵琶型）は埼玉県小敷田例を含め8例ある。小敷田例は伴出土器から4～5世紀に比定されているが、鎧の伝来が5世紀以降とされていることから、4世紀に遡ることはないと考えられる。

無花果型 無花果型は金属製品の年代比定から杓子型・三角錐型より後出する型となる。木製の壺型は香川県下川津遺跡を含め11例ある。下川津例を典型とみると、全体的に丸みを持つ無花果形をなす。吊手部は壺部の直上に短くつき方形穿孔が1ヶ所付く。壺型は6～8世紀を中心見られる。

C 舌鎧

舌鎧は鎌倉時代以降に主流を占める。舌部の長さから半舌と舌長への変化が認められる。大毛沖遺跡の場合は舌長とも考えられる。遺跡出土は大毛沖遺跡を含め4例しかなく取りあえず半舌・舌長の分類は行わず、「舌鎧」として一括することにした。

静岡県御子ヶ谷例は報告では壺鎧とされているが、舌部の側面観が発達していると考えられるため舌鎧に含めた。舌鎧は9世紀以降に出現する。

以上、遺跡出土の木製鎧を概観した。馬具としての鎧を考える上では金属製品を抜いては語れない。しかし、本稿の目的は木製品の中での大毛沖例を評価することにあり、金属製品を含めた稿は改めて用意する。

(3) 木製鎧の変遷と大毛沖資料の位置付け

木製鎧の変遷は金属製品と同じく、5世紀代の輪鎧に始まり、5～8世紀代に壺鎧が流行し、8世紀以降に舌鎧が出現する。大枠で、輪鎧、壺鎧そして舌鎧へと変遷するようだ。

ここで、木製品の特徴として「木取り」に視点を向けてみよう*1。

輪鎧・壺鎧はすべて縦木取りで、壺部と吊手部が一体化した一木作りとなる。一方、舌鎧は基本的には横木取りとなる。御子ヶ谷例以外の舌鎧は、芯持ちの幹部と枝部の枝分かれした部分を利用した横木取りとなる。

この縦木取りから横木取りへの変化こそ、壺鎧から舌鎧への変化と言える。したがって、御子ヶ谷例はこの過渡的な資料として評価されよう。

さて、大毛沖例は舌鎧で横木取りの手法で作られ、全面に黒漆を塗布した鎧である。ここで再度特徴を整理して本例の位置付けを行いたい。

まず、舌鎧という形態的特徴から見ていこう。比較できる類例として、道伝・居倉の2例のほかに奈良県手向山神社例があげられる。手向山神社所蔵資料は壺鎧（宝相華唐草象嵌壺鎧）が2例、黒漆半舌鎧が3例、鉄製半舌鎧が1例ある*2。伝世品ではあるものの、12世紀に比定されている。

大毛沖例との共通点はまず、壺部の稜線、いわゆる鳩胸と呼ばれている形態があげられる。また、舌部も他の手向山神社の類例より長い。しかし、黒漆半舌鎧に見られるような壺の縁に蒲鉾縁が施されていない。大毛沖例は壺部から踏込部まで蒲鉾縁の柳端がつく。

つぎに道伝・居倉例と比較してみる。道伝例は、壺部から踏込部にかけてのいわゆる鳩胸に入る稜線がないものの、ほぼ形態的には類似する。特に長く延びた吊手部は壺鎧を含めて比較してもほかにない。比較できる伝世品はすべて吊手が短く兵庫鎖と繋がる。一方、伝世品に近い資料は居倉例。吊手部が短く、先端に方形の穿孔があり、兵庫鎖が上部に付くことが予想できる。

大毛沖例は吊手部の先端が欠損しており、どのように装着していたかは不明となるが、踏込部の磨耗から見ても使用されていることは比定できない。また、道伝例は吊手部の先端まで遺存しているものの、先端に穿孔や接続痕跡は確認されていない。したがって、現状ではどのように鞍と繋がっていたのかはわからない。

このようにみてゆくと、大毛沖例は一方で、伝世品資料に近い優品的な一面を持つものの、機能的側面についてはその装着方法に課題が残る。いずれにしても、古代から中世への過渡的形態を持つことから、重要な資料となろう。

*1 木取りの観察については北野信彦氏に全面的にご教示を受けた。

*2 観察記載は鈴木友也氏による『日本馬具大観』日本中央競馬会、1991の記載を引用した。

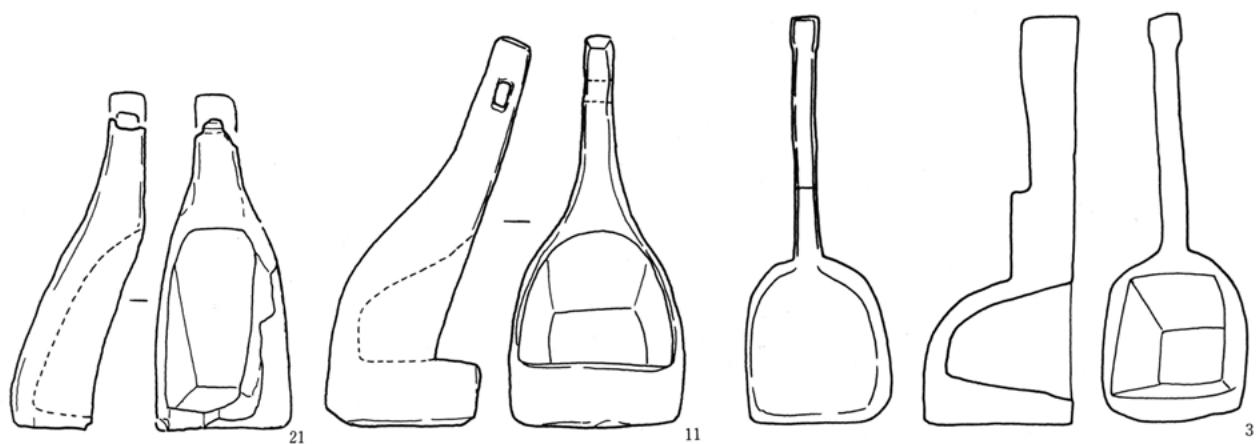
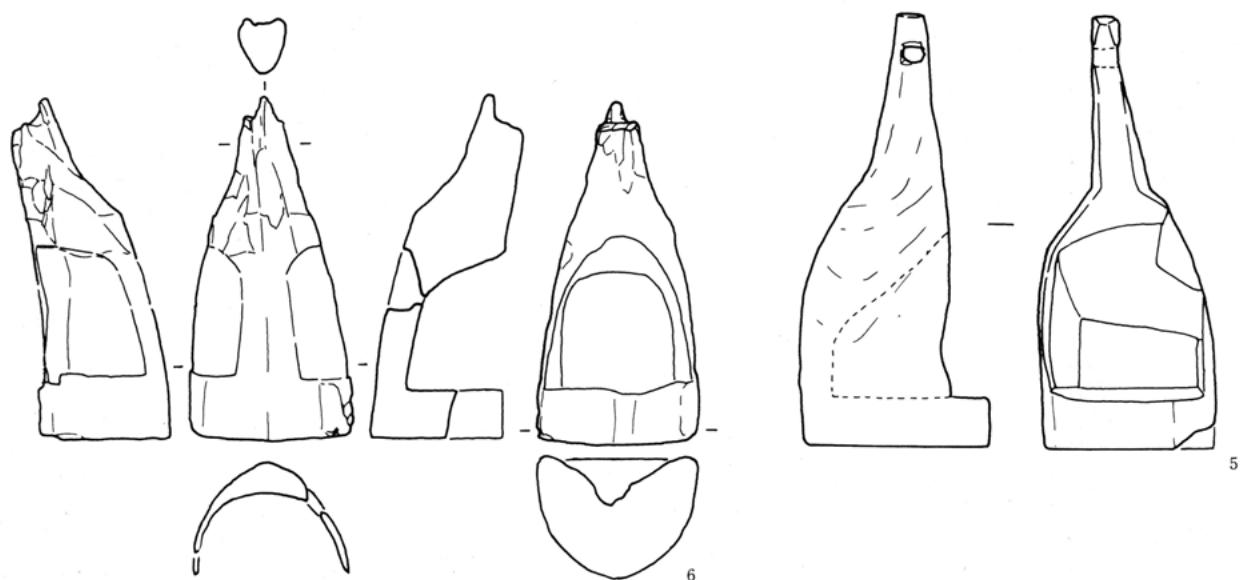
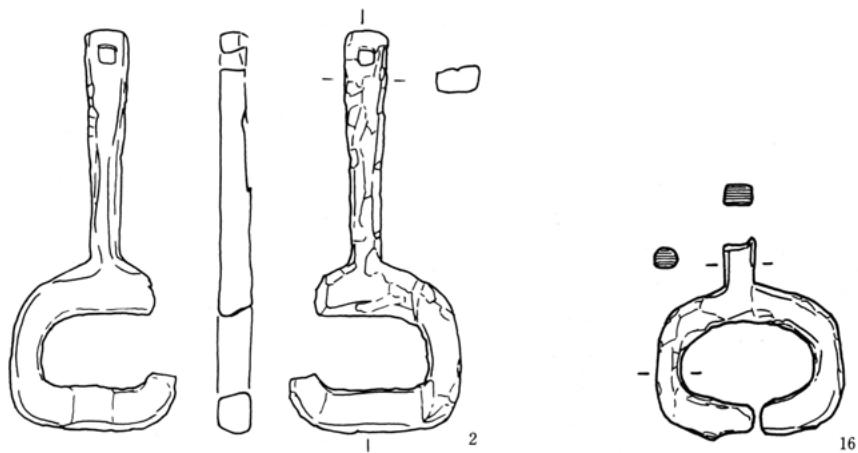


図151 木製鎧集成図(1) S=1/6

*番号は表32と一致

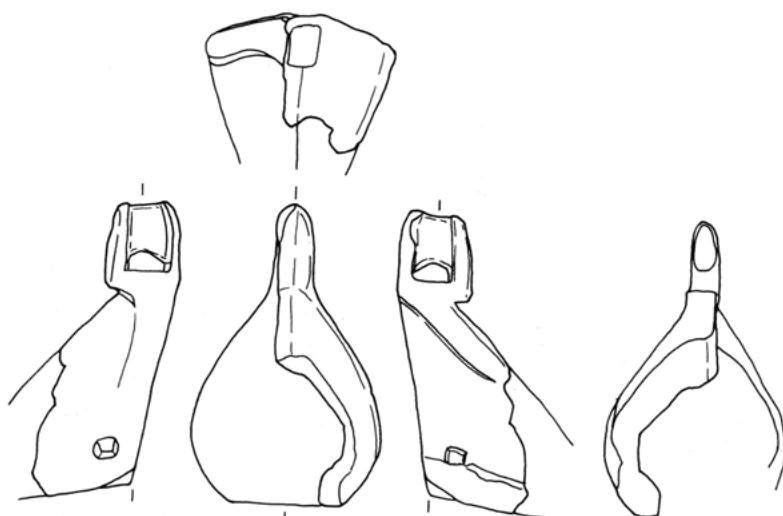
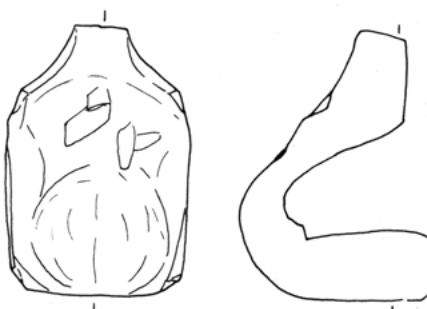
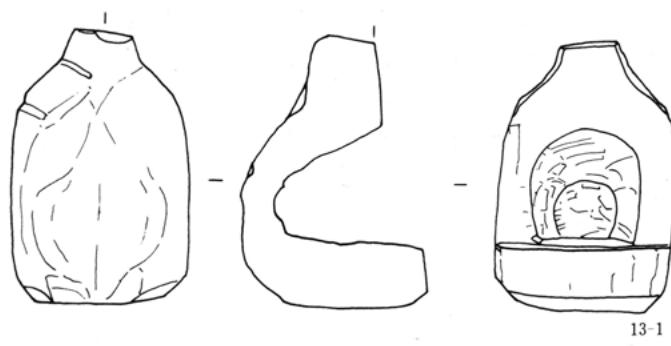
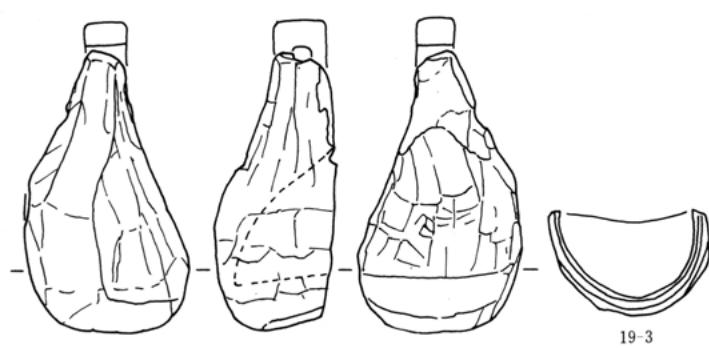
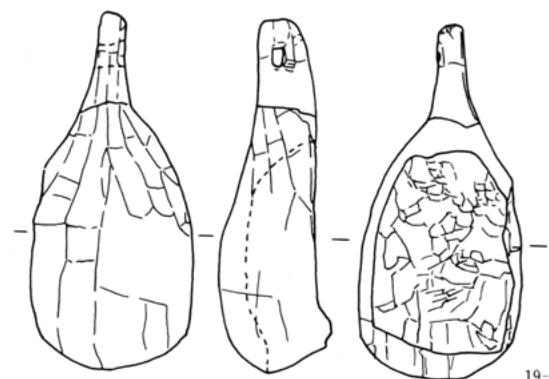
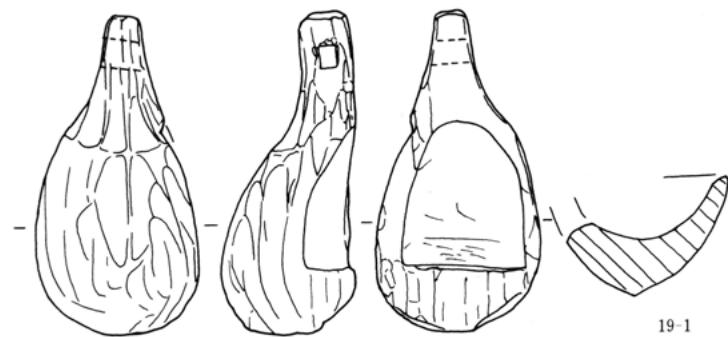
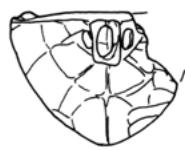
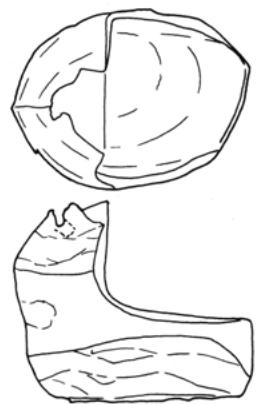
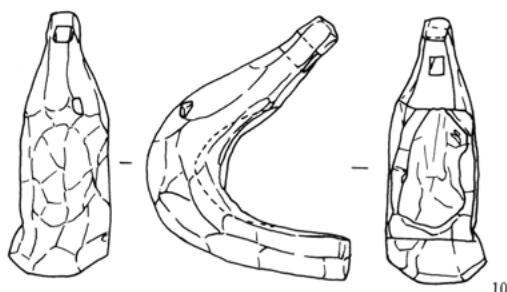
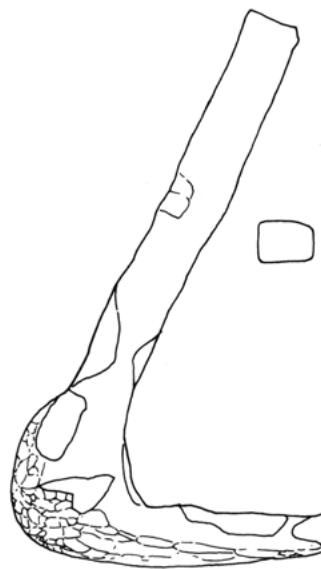


図152 木製鎧集成図(2) S=1/6

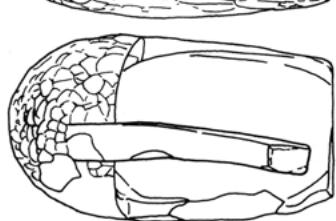
※番号は表32と一致



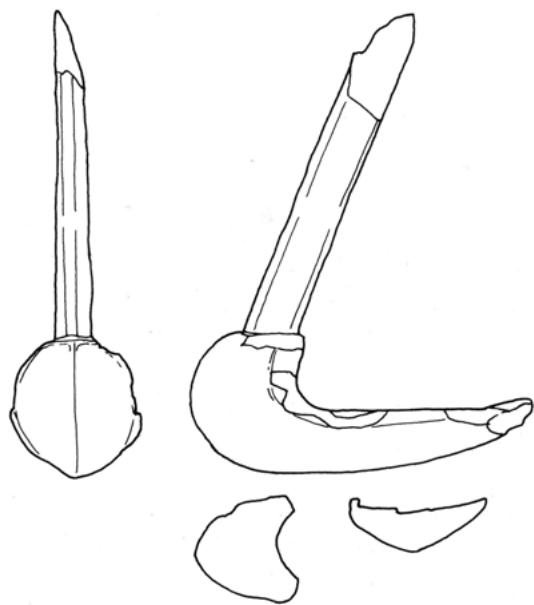
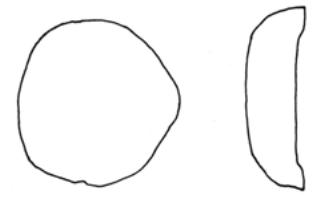
9



10



4



14

※番号は表32と一致

図153 木製鎧集成図(3) S=1/6

参考文献

- 大田市教育委員会 1989 『白坏遺跡発掘調査概報』
- 小野山節 1966 「日本発見の初期馬具」『考古学雑誌』第52巻第1号
- 香川県教育委員会ほか 1990 「下川津遺跡第2分冊」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII』
- 川西町教育委員会 1981 『道伝遺跡第1次重要遺跡確認調査概報』
- 行田市教育委員会 1979 『池守遺跡発掘調査概報』
- (財)愛知県埋蔵文化財センター 1996 『大毛沖遺跡』
- (財)北九州市教育文化事業団 『石田遺跡』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 『小敷田遺跡』
- 島田市教育委員会 1987 『居倉遺跡』
- 鈴木友也ほか 1990 『日本馬具大鑑』第1~3巻 日本馬具大鑑編集委員会編 吉川弘文館
- 田原町教育委員会 1993 『山崎遺跡』
- 東北歴史資料館 1974 『宮城県多賀城調査研究年報・第20次発掘調査概報』
- 豊川市教育委員会 1988 『山西遺跡』
- 浜松市教育委員会 1978 『伊場遺跡遺物編1』
- 福井県教育委員会 1978 「上河北(上筋生田)遺跡『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』
- 藤枝市教育委員会ほか 1981 「志太郡衛跡(御子ヶ谷遺跡・秋合遺跡)」『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財調査報告書III』
- 増田精一 1971 「鎧考」『史学研究』第81号 東京教育大学文学部
- 丸山雄二 1993 「神宮寺遺跡の調査」『滋賀考古』9 滋賀考古学会
- 三重県埋蔵文化財センター 1996 「六大A遺跡」『中勢道路調査ニュース』No.27
- 宮城県教育委員会 1994 『藤田新田遺跡』
- 山形市史編纂委員会 1986 『山形市史』別巻1
- 山田良三 1975 「古墳出土の鎧と形態的変遷」『権原考古学研究所論集』 吉川弘文館
- 山田良三 1994 「古代の木製馬鞍」『権原考古学研究所論集』第12 吉川弘文館

番号	遺跡名	所在地	分類・数	出土状況	年代	文献
1	多賀城跡	宮城県多賀城市	壺鏡(無花果型)・1	旧流路	8~9世紀	東北歴史資料館, 1974
2	藤田新田	宮城県仙台市	輪鏡・1	SD302	5世紀	宮城県教委, 1994
3	嶋	山形県山形市	壺鏡(杓子型)・1		7世紀	山形市史編纂委, 1986
4	道伝	山形県川西町	舌鏡・1	SD1	9世紀前半	川西町教委, 1981
5	池守	埼玉県行田市	壺鏡(三角錐型)・1	旧流路	6世紀後半	行田市教委, 1979
6	小敷田	埼玉県行田市	壺鏡(三角錐型)・2	旧流路	4~5世紀	(財)埼玉県埋文事業団, 1992
7	諏訪木	埼玉県熊谷市	壺鏡(三角錐型)・1		7世紀	
8	上河北	福井県福井市	壺鏡(三角錐型)・1	旧流路	7世紀	福井県教委, 1978
9	御子ヶ谷	静岡県藤枝市	舌鏡・1	旧流路	8世紀	藤枝市教委, 1981
10	居倉	静岡県島田市	舌鏡・1	旧流路	10世紀後半	島田市教委, 1987
11	伊場	静岡県浜松市	壺鏡(三角錐型)・1	溝	6世紀後半	浜松市教委, 1978
12	山西	愛知県豊川市	壺鏡(無花果型)・1	旧流路?	6~7世紀	豊川市教委, 1988
13	山崎	愛知県田原町	壺鏡(無花果型)・2	旧流路	7世紀	田原町教委, 1993
14	大毛沖	愛知県一宮市	舌鏡・1	旧流路	10世紀前半	(財)愛知県埋文センター, 1996
15	六大A	三重県津市	壺鏡(三角錐型)・1	旧流路	5~6世紀	三重県埋文センター, 1996
16	神宮寺	滋賀県長浜市	輪鏡・1	旧流路	5~6世紀	滋賀考古学研究会, 1993
17	水垂	京都府京都市	壺鏡(無花果型)・1	旧流路	6世紀	京都市埋文研究所, 1995
18	白杯	島根県太田市	壺鏡(無花果型)・1	旧流路	10世紀前半	太田市教委, 1989
19	下川津	香川県坂出市	壺鏡(無花果型)・4	旧流路	7~8世紀	香川県教委, 1990
20	石田	福岡県北九州市	壺鏡(無花果型)・1	旧流路	8世紀	(財)北九州市教育文化事業団, 1990
21	下山門	福岡県福岡市	壺鏡(三角錐型)・1	旧流路	6世紀	福岡市教委, 1973

表33 木製鎧出土遺跡一覧表